

## 近代市民の道德と経済生活

松田幸子

はじめに

「前資本主義的人間、それは自然な人間である。神が創ったままの人間である。それは今日の経済人が行なっているように、逆立ちをしてバランスをとったうえ、両手で走ったりせず、両足でしっかりと大地を踏みしめ、両足で世界を歩いていく人間である。自明のことながら、彼らのあらゆる努力、あらゆる配慮の中心には生きた人間が立っている」。これはドイツの社会学者ヴェルナー・ゾンバルト (Werner Sombart, 1863～1940) が『ブルジョワ・近代経済人の精神史』(以下ではブルジョワと略記する)の中の「ブルジョワの過去と現在」で述べている言葉である。

前資本主義的人間に古いスタイルのブルジョワ(およそ中世末期から十八世紀中頃までの人々)は、財産を増やすことを望み、手にした自分の財産を大事にするが、それは金銭だけを目的としているのではなく、人生の価値を生み出し、人間の幸福を維持するためのものであったとゾンバルトは言っている。

これに反し、新しいスタイルのブルジョワは、出来るだけ多くの利潤を得て事業を拡大することを最高の目的としているので、彼らの経済活動には、前資本主義において重視されていた人間の幸福ということが失われている。そのような彼らの経済活動は、いつ倒れるかわからない危険性をもっているという意味で、「逆立ちをしてバランスをとったうえで両手で走る」とゾンバルトは新しいスタイルのブルジョワを批判しているのである。

そしてゾンバルトは、古いスタイルのブルジョワの具体例をイタリアのレオン・バチスタ・アルベルティ (Leon Battista Alberti, 1404~1472) や、アメリカのベンジヤミン・フランクリン (Benjamin Franklin, 1706~1790) の著作の中などに見ることができると述べている。

ここでは、最初に近代市民道德の原像が書かれているといわれるアルベルティの『家族論』のうち、家政術について彼自身の考えを考察し、次にゾンバルトにしたがって、近代市民の道德と経済生活について述べてみたい。

### 一 アルベルティの『家族論』にみる神聖なる家政術

アルベルティが『家族論』を書いた動機は、まず第一に個人的なものであったと考えられる。アルベルティ一族は当時のヨーロッパで活躍した大商人であり、人々から常に称賛と尊敬を受けていた。アルベルティは彼の先祖の教訓を書きしるし、一族の者に読んでもらい、同時に庶子として生まれた自分自身

の地位を確立しようとしたものであった。第二の動機は社会的なものであり、十五世紀初頭のイタリア諸都市、特にフィレンツェの商人たちは、税金の重圧にたいする不満を強く持っていたので、商人たちを代表して自分たちの経済活動の正当性を主張しようとしたと考えられる。当時、すでに信用による取引が活発になっており、金融業も増加していたにもかかわらず、自給自足の経済の考え方にとらわれていた教会は、利息をはじめとして金銭からあがるあらゆる種類の利潤をきびしく断罪していた。たとえば、教会は、高利貸しとその家族および使用人を破門し、金貸しという不法な手段によって得た金を返済するまでは、死後キリスト教徒としての埋葬を許可しなかった。そのような社会状況のもとで商人たちは、自分たち独自の行動規範をつくり、自分たちの行動の正当性を主張する必要に迫られていた。そこでアルベルテイは、自分たちの活動を保護してくれ、危急のさいには避難所ともなり得る一族というものに信頼をよせ『家族論』を書いたと考えられる。

神聖なる家政術に関しては、右のような『家族論』の中で書かれている。

家政を神聖なものとするアルベルテイの考えは、前代未聞のものであるとゾンバルトは言っているが、特にここで述べられている節約は貧乏人の節約ではなく、裕福な大商人たちの自発的な行為であったというところに特別な意味があった。

## 経営の合理化

これは収入と支出の間の合理的な関係を樹立することである。それにはこれまで領主や貴族が行なってきたような支出中心の生活様式を捨てなければならない。領主や貴族は、支出に見合う収入をうるために良民に重税を課したり、掠奪のための戦争を行なえばよかつたのである。このようにして彼らは自分たちにふさわしい生活を維持してきたのであるが、この支出中心の経済を収入中心の経済に転換したのがアルベルティの家政術であり、それは次の彼の言葉にみることができよう。

「息子達よ、このことをしっかりと記憶しておけ。すなわちお前たちは支出を決してお前たちの収入より多くするな」

よく耳にする「入るを計って出るを制す」という言葉は、アルベルティの『家族論』のなかで最初に述べられている考えである。

### 節約

次にあげる言葉はアルベルティの節約に関するものであるが、その言葉の背後には、人間らしさを守るために金銭を大切にするのは重要なことであるという思想がある。

「不具戴天の敵にたいするようには人は余計な支出から身を守らなければならない」

「どうしても必要でない支出はただ狂気によってなされる」

「浪費が大変な悪事である反面、節約はまことに良い、有益で称賛されるべきである」

「節約は何人をも害さない。節約は家族を助ける。節約は神聖である」

「お前はどんな人々がもつとも私の気に入るかを知っているか。それはもつとも必要なことにのみ金錢を支出し、それ以上は支出しない人々だ」

### 秩序ある計画

アルベルティは上手な家政の切り回しには、深い熟慮から出た計画や秩序が必要であるという。そこで支出の対象を必要に応じて次のように分類しているが、その場合、大商人の大きな家計を窺い知ることができる。

その一：絶対に必要な支出は健康を保ち、快適な生活が出来る程度の食物や衣服の経費である。たとえば祝祭日には縫い取りとか刺繍などの不必要な飾りのない新調の衣服を、平日には何時もの服を、労働のためには着古した服を準備するがよい。

さらに家族の名誉を汚さない程度の堅牢な邸宅や店舗の維持費と、郊外のすばらしい眺望と澄んだ空気の中に別荘を維持する経費も絶対必要なものである。その別荘には穀物やワイン、木材、油、鳥肉などが自給自足できる程度の農地が付属しているのが望ましい。家族の健康を保つには新鮮な空気と、質のよい食物が必要だからである。財産としては金だけに片寄らず、土地も所有することが家政の切り回しにとって有利である。

またアルベルティ一族が過去において教会などに莫大な寄付を行なってきたように、公的な建造物のために寄付することは、一族の名誉を保つうえで絶対に必要な経費である。名誉な事柄にたいして吝嗇であ

ることは、一族にとり不利益なことが起こるからである。

その二：絶対に必要でないがとがめられない経費は、書籍や家の装飾品などの経費、その他、高邁な精神を養ってくれるものに対する支出である。

その三：絶対に非難されるべき経費は、貴族の生活を真似るような家の子郎党を養ったり、不必要な饗宴を盛大に行なうための経費である。また社会のしきたりに従って、成人した兄弟に世帯を分割させる経費も非難されるべきである。一族は同じ屋根の下に団結して暮らすことが必要である。

#### 時間の節約および勤勉

目的に即した時間の節約とそれに関連した勤勉については、アルベルティの次の言葉のなかにみられる。

「時間を惜しむ人は何事も成し遂げることがができる。そして時間を使いこなす術を心得ている人は、どんな事でもどんな思いも操ることができさる」

「非常に尊いものを失わないために、私は次の規則を自分に課している。決して怠惰に流れることなく、眠りを避け疲労に打ち負かされるまで横にならない、この習慣をどこにいても私は維持する」

「儲けは勤勉と苦勞とともに我々のふところの中で増えるであらう」

さらに家政の切り回しにとって重要な時間について、彼は次のように考えている。

人間にとって自分のものと言えるものは三つあり、それは魂と体と時間である。そして自然は身体を魂のいわば道具になるようにつくつたので、身体は魂の命令にしたがつて動くことになる。そこで人は魂を教育し、怠惰を憎み称賛されるようなものに魂をしむけるべきである。何故なら怠惰は不道徳な行為を呼びおこし、身体を損なわせ魂をも汚すからである。魂を有徳に保つには、称賛に値するような仕事に勤勉であることが必要であり、従つて時間の使い方の家政術が重要になってくる。たとえば良い家長は、アルベルティによれば、自分や召使たちの労働時間の正しい秩序をつくらなければならない。

家長は第一に、自分自身のわずかな時間も無駄にすることのないような時間割りをつくつて実行することである。次に召使たちが、時間を浪費しないよう配慮しなければならない。そのためには、一人で行ける仕事を二人またはそれ以上の人数で働かせないこと、それとは逆に、働き手が仕事の分量に対して少なすぎてもいけない。そのような時は、彼らは必ず怠けて仕事の秩序を乱すからである。さらに召使たちを適材適所で働かせることも、労働の効率を一段とあげることになる。

以上のことは人間にとって、時間は自分の自由にできる貴重な宝であるが、称賛に値する事柄のために使わなければ何の価値もなく、ただ失われてしまうというのが、アルベルティの考えである。彼の主張は、時間を浪費しないで勤勉である人は、人間の本性を完成させることのできる人であつて、それは神の称賛に値する人であるということができる。

## 二 近代市民道徳と經濟生活

ゾンバルトは「ブルジョワの過去と現在」と題して、ブルジョワの古いスタイルと新しいスタイルとを比較している。新しいスタイルのブルジョワの目標は、最高の利潤を得ることと事業を最大に拡大することの二つであるが、古いスタイルのブルジョワの究極の目標には、人間の幸福を考えており、それが近代市民の道徳の基本であると述べている。そこで、次に古いスタイルのブルジョワの具体的な考え方の例を考察する。(ゾンバルトは、古いスタイルのブルジョワとしてアルベルティやフランクリンを考えているので彼等の言葉の引用が多い)

## 品行方正な生活態度

取引にとって有利なことは、誠実な契約はもちろんのことであるが、それ以前に市民としての礼儀正しさと品行方正な生活態度が大切である。たとえば他人から非難されないように正しく生きるには、世間たいして良い市民でなければならぬ。ミサへの出席、日曜日には必ず教会で説教を聞き、いかがわしい場所には足を踏み入れず、言葉や態度や服装においても他人に不愉快な思いを与えないようにする必要がある。このような生活全体から信用が生まれ、取引にとつても良い影響をおよぼす。(アルベルティ・『家族論』)



## 富にたいする考え方

「わが息子たちに残す富は少くない。彼らが困るようなことはどんなにしても起こらないであろう。特に財産について彼らは何とか頼みますと無理やり卑屈な言葉を言うことがないであろう」(アルベルティ・前掲書)

「友情と称賛を獲得するために役立つように、富を使うことが適切である。幅広く貴重なことに富を使うことで名声と権威を得ることができ。そして国にとって最後に頼れるものは一般市民の富である」(アルベルティ・前掲書)

「もっぱら上品な方法で獲得された富だけが、人々を心豊かにする」(アルベルティ・前掲書)

「賢人はおのれが正当に獲得したもの以上の富を欲しないし、それを節約して使用し、快く分配し満足して生活する」(『人間生活の経済』フランクリンの著作からの抜粋集)

「お前が利益を得るために販売するときには、良心の嘖きに耳を傾け、適度の利益で満足すべきである。そしてお前は買ひ手の無知を利用してはならない」(前掲書)

「金と財貨を集めるのは分別のあることだ。しかしこれを目的にかなって使用するものは理性的である。富ではなくして、その賢明な利用が人間に幸福をもたらす。たとえこの世の財貨をすべて手に入れたとしても、その人が誠実でなければ何の助けにもならない」(ベルク博士『金持ちになる技術』、ベルク博士はフランクリンの教えを広めた人)

以上の言葉の背後には、人間性を保つために金銭は存在するという考えがみられる。

### 労働に関する姿勢

古いスタイルのブルジョワたちの経済活動はテンポが遅く、彼らの生活態度全体が落ち着いている。彼らの行動のなかには、まだ新しいブルジョワに見られる嵐のような激しさは見られない。それは「時は金なり」の言葉で有名なフランクリンも例外ではない。次はフランクリンの一日のスケジュールである。

五時 起床、洗面、神への祈り、その日の仕事を整理し、そのための決意をかためそれぞれの研究を続け、朝食をとる。

八時 仕事を始める。

十二時 自分の営業用の帳簿を読む。昼食。

二時 仕事を始める。

六時 すべてのものを再び元の場所に戻し夕食をとる。音楽、読書、会話その他の娯楽。過ぎた一日を吟味する。

十時 就寝。

自分の時間を有効に使おうと頭を悩ませていたフランクリンの仕事ぶりは、このようにのんびりしたものであった。それでいて彼は当時の勤勉な企業家の典型的な一人であったのである。アルベルティも、勤勉を尊ぶ人はゆっくり歩くべきだといつねに言っていたといわれている。このようにしてゆつたりとした

日々を送ることを理想としていたイタリアの商人たちの中には、晩年は別荘での静かな生活を望んでいたという人を書いている人が多い。アルベルティも田園生活を礼賛している一人であった。

競争相手と顧客への態度（首尾一貫して顧客の増大をねらったすべての行為——顧客の横取りや安売りなど——は禁じられていた。）

「商人は他の商人の顧客をその店舗や屋台から呼び出してはならない。あるいは両手で合図したり、他の諸々の仕草や身振りでその顧客の購入を妨げてはならない。……」（一六七二年、一六八二年、一六九二年のザクセンの小商人の条令第十八条）

#### 技術にたいする態度

技術の進歩は人間の幸福に害を及ぼさない時においてのみ望ましいと考えられていた。たとえば技術の進歩がコストを下げ、生産物の価格をやすくしたとしても、その技術が導入されたことで失業者が出現するようなことがあれば、その技術の導入は中止されることもあった。したがって当時の企業家は、労働を節約する機械の導入にたいして嫌悪感を示すことが多かった。エリザベス一世（在位一五五八年〜一六〇三年）統治下のイギリスでは、広い布地を晒すための労働節約型の機械の導入が同業組合の親方に拒否されたり、フランスでは一八八四年まで靴下編み機の使用が禁止されていた。これらのことは、機械の導入によって失業者が出現したり、労働者の収入が減少したりすることをおそれたからである。

以上のように古いスタイルのブルジョワたちの経済活動の基本は、人間の幸福であったことがわかる。しかしその後高度に発達した資本主義時代がやってきて新しいスタイルのブルジョワが出現すると、この基本が失われていったとゾンバルトは述べている。

おわりに

ゾンバルトによって市民道徳の教師であると評価されているアルベルティが説いていることは、自分たち商人の活動が人間として如何に立派なものであるかということであった。またそれは当時、営利は不道徳なものであるという伝統的な立場に立っていた教会から、自分たち商人の活動を認めてもらうものであったが、現在の企業家たちの活動には、今やゾンバルトの言うように市民道徳の枠の拘束はなくなり、ただ無制限に事業の拡大のためにひた走りに走っている姿がみられる（中小企業者には例外もみられるが）。そこには顧客にたいする何の配慮も見られず、ただ利潤だけを追い求めている姿がみられる。

このことが現代の資本主義の歪みの大きな原因の一つになっていると思われる。したがって現代の企業家ももう一度人間の幸福を中心においた経済活動をするには、前資本主義時代の市民道徳にたちかえることが必要ではないかと思われる。